

戦記

一父と母に

8

松崎一平

話しおえた男性にたいして、わたしは返すことばを探しあぐね、しばらく黙っているしかなかった。女性のほうは、いくども涙を流したために脂っ気がなくなってしまったのか、皮膚がひどく薄く透いて見える顔をゆがめて、こみあげる嗚咽をかりうじてこらえていた。ようやく、わたしの知るこの付近の状況を、昨日の娘の話などを交えてぼつりぼつりと話すと、このあたりの状況は、二人の住まいのある山沿いの地域のそれとはかなり異なるらしく、興味深そうに耳を傾けていた。たしからしく話すことはできても、二人の知りたいことについて確実なことは、じれったいくらいなにひとつ話すことができず、最後には、息子さんがご無事なことをお祈りします、と告げて、話しを終えるしかなかった。ほんとうに無事だといいいのですが、と二人は声をそろえていい、憔悴しきった表情で深く頭を下げると、あらためて波打ち際の方に、重い足取りでのろのろと歩いていった。その姿にひどくこころを打たれるいっぽうで、わたしは、なにかむじょうに腹が立った。腹立たしいばかりでなく、なにかしなければ、と強く思った。昨夜、娘の話聞いたときから、すでにこころが騒いでいたために、今朝あわただしく海岸の様子を見にくる気持ちになったのが、その気持ちがさらに激しく増幅させられたようだった。その気持ちに促されてわたしも立ちあがり、二人を手伝うつもりで、あとを追ってゆっくりと波打ち際に向かった。

昼が近づき、まばゆい陽光がぬくみを帯びてきたが、ゆるやかに海から吹く風はまだ冷たく、うなじから背中に吹きこむと、ひんやりとする。シャツの襟元のボタンをいそいで留め、ジャケットの前を閉じる。もともと白っぽい砂浜は、おだやかに寄せては返す波でぬれている部分が、ちょうど湿り気の残る陶土のような色合いとなり、そこに打ち上げられた貝殻や海藻、波に運ばれるうちに摩耗した白や青色の石ころなどがまばらに散在している。貝殻は、白かったり褐色だったり赤かったりする。海藻は、黒々としていたり、濃い茶色だったり、赤茶けていたりする。波がてんでに運んできたはずのそれらの形や色が、模様をなしているかのようで、おもしろい。海面に目をやると、早春の海は東方にどこまでもひろがり、水平線は青空の果てに溶けこむかのようだ。船は一隻も見えない。いくさが始まってから、船を目にすることは、ほんとうにまれになった。船の浮かぶことのない海というものは、目にはひろがりをもつが、それにもかかわらず、現実には閉ざされた感じがするものだ。ぼんやりとそんなことを考えながら、わたしは、視線を波打ち際に沿ってなるべくゆっくりと左右に動かし、歩みを進めた。足を踏みだすごとに、ざっ、ざっ、と砂がへこむ。音がするわけではないが、足がたしかに音を感じる、砂のうえを歩くときの独特の感覚。姉や妹との、こど

ものころの浜遊びを、明るい歓声とともに、ふたたび思い出さざるをえない。

煉瓦色や灰鼠色の素焼きの蝸壺の破片が、あるいは青緑色のガラスの浮き球やサイダー瓶、茶褐色のビール瓶の破片が、長いあいだ海底を転がっているうちに角が取れて丸くなり、ガラス片の場合は表面のつや消し状態になって、自然物のような形姿に変貌した扁平な、ややおおきな不正形の基石様の石が見つかる、こどもたちは、宝石でも見つけたかのようによろこんだものだ。貝殻の破片にも、同じように海に磨かれてやわらかい丸っこい形になったものがあり、同じくこどもたちの宝物となった。砂の上に目をこらしながら、砂浜をいつ果てるともなく歩きまわったものだ。宝石を見つけると、見つけ、とか、あった、とか、発見、とかと、周囲に聞こえるように声を張りあげる。ときには、小さな桜貝が見つかることもある。それはえり抜きの宝物となって、うちに帰るとキャラメル空き箱に真綿を敷いて、壊れないようにそっと保存し、しばらくのあいだ発見した者の自慢の種となった。ずっとあとになって『失樂園』第一巻で、マンモン（もともと「富」という意味だという）の描写をはじめて読んだとき、わたしは砂浜で宝探しをしたこどものころのことを思い出し、思い出したことをひどくおもしろく感じたものだった。ヒューズ第六百七十八行目から。その部分は、岩波文庫の平井正穂訳（六百七十七行目の終わりから）だと以下のとおりだ。

…指揮官は

マンモン—そうだ、天から落ちた天使のうちこれほどさもない
根性の持主もなかったという、あのマンモンであった。天国に
いた時でさえ、彼は常にその眼と心を下に向け、都大路に
敷きつめられた財宝、つまり足下に踏みつけられた黄金を、
神に見える際に切々と胸に迫るいかなる聖なる祝福よりも
遙かに讃美していた。…

墮罪前、天国にあったときに、黙示録第二十一章二十一節、文語訳聖書で、「都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なりき」といわれている純金の敷かれた大路を、神の祝福よりも富を好み、その黄金の舗道に、文字どおり心身を傾けてあるいていた、まだ天使の地位にあったときのマンモンの描写に、はじめてそこを読んだとき、わたしはミルトンにはめずらしいユーモアを感じた。そんなことを思い出し、波打ち際に視線を遣るわたしの姿勢は、いくらかマンモンに似ているかもしれない、などとおかしなことを考えながら、ふと視線を上げると、二百メートルほど向こうに、高い火の見櫓のような、白銀色に塗られた鋼鉄製の巨大なタイヒトーが眼に入った。高さはちょうど二十四メートルあるはずだ。その塔の上に人が三人いる。かれらは、背丈ほどもある柵の間に顔を埋めるようにして、海の方を見つめているようだった。

タイヒトーは、三十数年前、母の生まれた育ったD市のある東北地方を襲った巨大地震と、直後に三陸から北関東沖にいたる広い地域に襲来した巨大な津波による大災害の経験を踏まえて、津波の招来が予想される国中の海岸に築かれたものだ。「3・11」といいならわ

され、よく知られている、地震のあった三月十一日のその日、D市に暮らしていた姉夫婦に、地震直後からいくど電話をかけてもまったくつながらず、安否が心配で一晩中ほとんど一睡もできず、明け方になってようやくまどろんだ父と母の枕元に、目覚まし時計代わりに置いてあった携帯電話が呼び出し音を響かせた。午前七時すこしまえのことだったという。母が、あわてて携帯電話を手に取り、わたしです、無事です、という姉の声が聞こえると、母は姉の名前を呼び、よかったー、と叫んで、泣いた、と、その後なんか父母から聞かされた。そのときD市は、水道も都市ガスも止った上に停電中で、携帯電話の蓄電池が残り少ないために、あわただしい会話で、姉夫婦の無事と、古い住まいに意外に被害がなかったことを確認しただけで終わったそうだが、あの電話でほんとうに安心した、と父も母も、よくいっていた。じっさい、そのあとふたたびしばらく電話がまったく通じなくなり、姉にとっても、父と母にとっても、一瞬電話が通じたことが、一種の奇跡に思えたらしい。その地震とその後の津波による浸水で引き起こされた電源の喪失が、原子炉の冷却水の循環を妨げ、炉心の露出をもたらして水素爆発を誘発し、深刻な放射能汚染を招いた、D市の隣の県で起きた深刻な原発事故については、三十年を経たいまも廃炉作業はまだ終了していないはずだ。放射能の除染にしたところで、最終的な処分は終了してはいない。原発事故の責任の問題、地震と津波からの復旧の困難が、国家の役割への不信を社会に醸成し、それに伴って人々の国家観も変容し、その後の国政や経済の混乱の原因となり、このいくさの勃発につながったのかもしれない。いくさが始まるまえには、節目節目にテレビ・ニュースや新聞が、廃炉や除染作業の進捗状況を、もどかしそうに伝えるのが常であるにしても、なにがしかの情報を得ることができたが、いまはまったく状況はわからない。大丈夫なんだろうか。そんなことを考えながら、タイヒトーの上にいる人たちに目をこらすと、かれらが突然、海の方角を指さしながら手を伸ばして、口々になにか叫び始めた。ちょうどタイヒトーのあたりを歩いていた先刻の男女が、砂に足を取られながら、よたよたとタイヒトーに向かって走り始めるのが見て取れた。

(この章、続く)